

## フォークランド戦争の前兆（1） ——領空侵犯——

梅 川 正 美

フォークランド戦争はどのようにして始まったのか。この点はあまり明白ではない。非常に長期的に見れば、フォークランド諸島をめぐる主権紛争は18世紀から続いている。したがって主権紛争は、間接的な要因の一つであるということではできても、とりわけ1982年に戦争が勃発した直接的な契機ではない。

もちろん一番直接的な要因は4月2日のアルゼンチン軍によるフォークランド諸島の占領だが、それ以前に、いくつかの事件があった。しかし、それが侵攻につながるとはイギリス政府は判断しなかった。ならばイギリス政府は、それらの事件をどのように処理したのであろうか。ここで言う事件は、まずフォークランド諸島の領空侵犯事件であり、次に South Georgea 諸島への上陸事件である。この小論では領空侵犯事件をとりあげ、上陸事件については別稿とする。

戦争開始から3か月ほど前になる1982年の1月14日に、フォークランド政庁の M・W・Growcott からロンドンの外務コモンウェルス省（以下、外務省と略）の A・D・Smith にあてた手紙がある。これは下記のように、アルゼンチン軍の軍用機が領空侵犯したと述べている。

1982年1月10日の日曜日、グリニッジ標準時午後2時にアルゼンチン軍の C130ハーキュリーズ軍用機が Cape Pembroke のイギリス領空に、南方に向かって侵入し、同日午後7時30分、北方に退去した。これは、あらかじめイギリス航空局の許可を得ていないものである。戦闘機は非常に高く飛んでいたため、飛行機の特定は困難だったが、翌日、アルゼンチン軍の空軍少佐である Gilobert が、この侵入を認めている。イギリスの主権を保持するために、この事件にどのように対処したらよいか、ご教示いただければ幸いです。<sup>(1)</sup>

---

(1) M. W. Grocott to A. D. Smith, 14 January 1982 (FCO 7/4913).

これが1982年1月10日の書簡である。ところが、同じ領空侵犯は、前年の1981年にも何度か起きていたようである。Growcott は、この書簡の中で、前年の「1981年6月9日の私の書簡に同封されていた報告、7月27日のブエノス・アイレスへの電報71号、さらに11月5日の電報179号に対しても、何ら対応がされていない」と苦情を述べている。「フォークランド諸島の住民は、このような領空侵犯に対して、迅速に報告している」のにイギリス政府の対応は遅れているとして「必要な対応が望まれる」と書いている。

たしかに Growcott の言うように、イギリス政府の反応にはぶかった。この1月14日の書簡に対する返事は、その後、半月ほどたった2月2日まで遅れこんでいる。外務省の A・D・Smith からの返事は下記のとおりであるが、これによると、アルゼンチンに対する危機感はまったく感じられない。

この種の行為に対してわれわれが公式の抗議をする前に、報告されている事件について、われわれは正しい事実を掌握していなければならない。事の性質からして、これは容易なことではない。貴殿が書簡の中で指摘している領空侵犯は、貴殿も言うように、アルゼンチンの航空機によって行われたということが自ら確かめられているわけではない。われわれは、アルゼンチンがこれを認めたとは考えていない。従って、公式の抗議をすることができるほど十分な証拠を持っているとは思われない。そこで、ブエノス・アイレスの Mike Hickson に抗議させることにした。この抗議が行われたのちに、この事実をフォークランド諸島の島民に知らせてほしい。

たしかに C130ハーキュリーズ機がどの国のものであるかは、フォークランド政庁によっては確認されていない。もしイギリス政府が公式に抗議したとき、アルゼンチン政府が Gilbert の証言を否定した場合、イギリスはそれ以上の抗議ができないだろうとも考えられる。そこで、イギリス政府は、政府として抗議するのではなく、大使館から外務省への抗議にとどめたと言えないこともない。

しかし、A・D・Smith は上の書簡を出した翌日の2月3日に、一応は、ブエノス・アイレスにおけるイギリス大使館の Mike Hickson に書簡を送り、1月10日のアルゼンチンによる領空侵犯について抗議するように指示している。この事実は「空軍少佐である Gilbert によって認められているので、われわれの主権を保全するためにアルゼンチンの外務省に抗議しなければならない」としている。<sup>(3)</sup>

(2) A. D. Smith to M. W. Growcott, 2 February 1982 (FCO 7/4913).

(3) A. D. Smith to M. Hickson, 3 February 1982 (FCO 7/4913) .

その抗議文は下記のようになっている。

1982年1月10日にフォークランド諸島の領空を、事前の許可なく、アルゼンチンのC130機が飛行したことについて、イギリス政府は、フォークランド諸島の領空侵犯があったと指摘する。このような、アルゼンチン軍の航空機による不許可の侵入につき、アルゼンチンの諸当局に抗議する。<sup>(4)</sup>

このようにイギリス政府は、その抗議について、首相から大統領への抗議のような強いものではなく、外交ルートでの温和な抗議にとどめている。この書簡は2月3日であるが、これを受けて、ブエノス・アイレスのイギリス大使館は、2月9日に、上記と同様の抗議声明を出している。<sup>(5)</sup>

しかし実は、このように抗議が遅れているときに、さらなる領空侵犯がおきていた。2月2日に、M・W・Groecottは、A・D・Smithに対して、別の書簡を出しているが、この中で「1月14日の領空侵犯にくわえて、さらなる領空侵犯を報告しなければならない」として、次のように述べている。

Grytvikenの基地で確認されたことであるが、1月24日のグリニッジ標準時14時46分に、アルゼンチンのC130ハーキュリーズが、Wills Island方向から侵入しBird Islandに接近した。Elliot RockとBird Islandの間を南西にむけて通過した。高度は300フィートから400フィートであった。Pearson Pointの南方に方向転換し、Stewart Straitから北方へ方向転換して飛び去った。尾翼と胴体にアルゼンチン軍のマークはたしかに確認された。

アルゼンチンによる領空侵犯については、島民のあいだで懸念がたかまっており、どのような行動をとられるか、緊急に示してほしい。<sup>(6)</sup>

1月24日の事件が2月2日の書簡で報告されるのであるから、ずいぶん遅い報告であると思われるが、フォークランド政庁が危機意識をもったことは確かである。Grytvikenは、South Georgia諸島の本島の中心にある基地であり、Wills IslandやBird Islandなどは、諸島の北西端の島々である。Pearson PointはBird Islandの南西に位置する。したがって領空侵犯は、South Georgia諸島の北西端で行われたことになる。しかし、今回は、アルゼンチンの軍用機であることは確

(4) Appendix to A. D. Smith to M. Hickson, 3 February 1982 (FCO 7/4913).

(5) British Embassy, Speaking Note, 9 February 1982. (FCO 7/4913).

(6) M. W. Growcott to A. D. Smith, 2 February 1982 (FCO 7/4913).

認したとなっており、前回よりも領空侵犯は明白である。しかしフォークランド政庁からの連絡も遅く、イギリス政府の抗議も遅れているので、イギリス大使からの抗議の内容には、二回目の領空侵犯事件は含まれておらず、お粗末な結果となっている。

しかし、1月24日の領空侵犯事件にはイギリス政府は、前よりやや真剣に対応している。2月9日に、外務大臣であった Lord Carrington が、ブエノス・アイレスのイギリス大使館に対して「2月2日の M・W・Growcott の書簡について」と題して下記のような電報を打っている。

もし2月3日の Mike Hickson に対する A・D・Smith の書簡に関して、何の行動もとられない場合には、抗議を Growcott の報告にある第2の事件を含めたものに拡大しなければならぬ<sup>(7)</sup>。

これが書簡ではなく電報であること、さらに発信人が大臣に格上げされたことは、イギリス政府の危機感が、やや拡大していることを示すだろう。しかし、前に述べたように、ブエノス・アイレスのイギリス大使館からの抗議はすでに行われていたので、さらに抗議するのかどうか、この点を大使館からイギリス外務省に問い合わせることになる。大使館の M・Hickson は、A・D・Smith に対して書簡を2月18日に出している。この中で言われている2月9日の電報34号は大使館が抗議をしたあとの報告電報と思われる。電報33号は、前に述べたイギリス政府から大使館にあてた電報であるが M・Hickson は次のように述べる。

「私は1月10日の領空侵犯に対して抗議を行ったが、この点は2月9日の電報34号で報告した。」しかしこれは「2月9日の電報33号を受け取る前」であった。この電報33号で1月24日の領空侵犯事件についての抗議を含めて行えと述べられていたのであるが「もしこの事件について、さらなる発表をするべきかどうか、ご教示いただきたい」としてロンドンの支持をあおいでいる。なお「2月9日の抗議に対してはアルゼンチン側からの反応はない」と付加されている<sup>(8)</sup>。

これまでのことからわかるように、フォークランド政庁とイギリス政府さらにアルゼンチンの大使館との間には、緊密な連携がなされておらず、意識もくいちがっている。連絡も、すべて電報で行えば迅速であったと思われるが、時間のかかる書簡を使っている。上の2月18日の M・Hickson からの問い合わせに対して、イギリス外務省からの返事も、3月2日まで遅れこんでいる。この返事の中で、

(7) Carrington to Buenos Aires, Telegram Number 33 of 9 February (FCO 7/4913).

(8) M. Hickson to A. D. Smith, 18 February 1982 (FCO 7/4913).

A・D・Smith は次のように述べている。

この種の事件に対してわれわれは引き続き抗議するが、この点についての総合的な問題についてニューヨーク会談において取り上げられた。そこで、貴殿におかれては、アルゼンチンの外務省に対して、1月24日の領空侵犯について述べていただきたい。その際、私の2月3日の書簡を参照していただきたい。<sup>(9)</sup>アルゼンチンの反応については報告していただきたい。

ニューヨーク会談というのは、当時イギリスとアルゼンチンの間で、フォークランド諸島問題について行われていた会談であり、領空侵犯も、一般的にはここで問題になっているとSmithは言おうとしている。しかし、この書簡では、1月10日の事件で使われたアルゼンチンに対する「抗議」protestの用語ではなく「述べる」*speak*とされている点は、むしろ抗議の態度を弱めているとも思われる。

このSmithの3月2日の書簡に対して、M・Hicksonは3月8日に返事を書いている<sup>(10)</sup>。これは、次のような声明を出したとして、その内容を添付している。それによれば、前に述べた1月24日の領空侵犯の内容を述べたうえで、この点について「アルゼンチンの当局に対して抗議する」と述べている<sup>(11)</sup>。

1月24日の事件を、3月初旬になって抗議しているのであるから、イギリス政府のアルゼンチンに対する対応には、まったく危機意識がなかったと言わざるえないだろう。このようななかで、領空侵犯はさらに重大になる。次の事件が2月24日に発生している。M・W・GrowcottからM・HicksonとA・D・Smithの両者への3月1日の書簡によれば「フォークランドの民間航空局は、重大な結果をもたらす可能性のある事件を報告してきた」という。それによれば「2月24日の12時30分ごろ、航空管制業務を行っていた航空局はStanley空港の近隣でスペイン語を話すパイロットが乗った飛行機を発見した。このとき、フォークランドの島民の飛行機が同空港に接近していた。航空局はスペイン語を話すことはできなかったが、当該飛行機は高度12000フィートを飛行していることを知ることはできた。この高度は島民の飛行機の高度よりも高かったが、島民の飛行機の上昇限界内にあった<sup>(12)</sup>」という。

そこに「LADE（アルゼンチン空軍航空）の職員が管制塔に到着して、その飛

(9) A. D. Smith to M. Hickson, 2 March 1982 (FCO 7/4913).

(10) M. Hickson to A. D. Smith, 8 March 1982 (FCO 7/4913).

(11) Appendix to M. Hickson to A. D. Smith, 8 March 1982 (FCO 7/4913).

(12) M. W. Grocott to M. Hickson, cc: A. D. Smith, 1 March 1982 (FCO 7/4913).

行機はアルゼンチン空軍のリアジェットであることをきかされた」。しかもこのリアジェットはその後 2 日間にわたって飛来しており、きわめて危険な行為であると報告している。

当時イギリス外務省は、ニューヨークで、アルゼンチン政府と交渉中であった。アルゼンチンは自国の主権それ自体を認めさせようとしていたのに対してイギリス政府は、リースバック政策を含む提案をして、イギリスの主権を強く主張することはなかった。アルゼンチンの強硬姿勢に対してイギリスは柔軟姿勢だったわけであるが、この一環として、領空侵犯への抗議も弱かったと思われる。

このような環境においてアルゼンチンの領空侵犯事件はさらに増える。フォークランド政庁から外務コモンウェルス省への 3 月 12 日 23 号の電報は次のように報告している。「3 月 6 日の現地時間午前 3 時ごろ Stanley の上空に未確認の飛行機が、南方をめざして飛来し、多くの住民が目覚めた。さらに 3 月 8 日にも、現地時間 19 時 20 分に別の領空侵犯があった。このようなアルゼンチンによると思われる無許可の領空侵犯については、強い懸念がある」と訴えている。しかも領空侵犯はさらに増加する。フォークランド政庁からの 3 月 30 日 28 号電報によると、次のように報告されている。

「3 月 29 日の現地時間 13 時 30 分に Sea Lion Island の上空を、未確認の飛行機が北東から領空侵犯し 2 度旋回し、南西に飛び去った」。しかも、この飛行機は以前領空侵犯した「C130 と同じものであることが、ほぼ確実に断定できる」としている。また、同じ「3 月 29 日の現地時間 20 時にも、Stanley の領空が侵犯された。すでに暗くなっていたときであり、飛行機の様子の確認は不可能であった。しかし、その飛行音から判断すると C130 とと思われる。同じ飛行機が Green Patch と Port Louis でも確認されている。これらの点についてアルゼンチンに抗議されたい」と依頼している。

実は、3 月 29 日のころは、アルゼンチン軍がフォークランド諸島に侵攻することが十分予測されると、イギリス政府がようやく考え始めたときである。ブエノス・アイレスではフォークランド諸島の占領の世論があおられており、その危険性は増加していた。しかし、イギリス政府が、アルゼンチンの領空侵犯について、最初から真剣に問題にしておれば、アルゼンチンの行動の抑制になった可能性がある。

(13) Port Stanley to FCO, Telegram Number 23 of 12 March (FCO 7/4913).

(14) Hunt to FCO, Telegram Number 28 of 30 March (FCO 7/4913).